

M. E. Ingham:
The Harmony of Goodness.
Mutuality and Moral Living according to John Duns Scotus
Franciscan Press, 1996, pp.xix + 159

小 川 量 子

北米では A. Wolter の影響によりスコトゥス研究が盛んになってきたが、近年殊にその倫理学に対する関心が高まっている。著者はすでにスコトゥスの自由意志に関する博士論文を出版し¹⁾、その後も倫理的問題についていくつかの研究論文を発表しているが²⁾、本書はそうした文献研究を踏まえながらも専門的な研究書ではなく、著者自身の倫理の見識も織り込みつつ、広い見地からスコトゥスの現代的な意義を示し、その再評価を促すために書かれた啓蒙書である。そのため、スコトゥスの微妙な面が若干切り捨てられている気はするが、著者の想像力豊かな洞察力によりテキストにはあらわれていない面にまで読者の関心を広げる点で示唆に富んでいる。

本書は、スコトゥスの倫理観を特徴づける「相互性における美的調和」というテーマに焦点をあて、そこから彼の倫理的神学のもつ様々な局面を一望することをめざしている。序論において、風に揺らいで形を変えながらハーモニーを奏でるウィンドチャイムの比喻によってスコトゥスの倫理的調和が印象的に描き出されるが、この比喻はスコトゥスが肉体美の比喻で倫理的行為を構成する様々な要素のあいだに成立する調和について語り、音楽的なハーモニーの比喻で倫理的行為と神の恩寵との協力関係をあらわしていることに基づいている。このように視覚的美と音楽的美とを一体化して表現することにより、著者は二つの異なる倫理的段階が互いに密接に連関しているというニュアンスも付加することになる。さらにこの比喻は、倫理的行為における調和が、すでに出来上がった静的な調和ではなく、まわりの状況に応じて最善のバランスを模索しながら、そのつど一回的に生み出される動的な調和であるという面に目を向けさせる点でユニークな効果をもっている。

著者は、倫理における美的調和という古典的なテーマに基づいて、スコトゥスの倫

理観の古代思想や伝統的神学との連関を強調しているが、スコトウスの調和の理解の独自性については特に言及していない。それでも本論の始めで、スコトウスにおける相互性の理解が三位一体のペルソナ論およびキリストの受肉論にまでさかのぼりうるものが指摘されているので、その調和が根源的な同一性に基づく調和ではなく、存在における究極的差異に基づき、それぞれの固有性を保ちながら成立する相互関係であることが示されている。その意味でスコトウスの存在論における自体性と関係性との根源的差異は倫理学における自由と相互性を理解するためにも重要な意味をもつことが理解される。

このように倫理的行為が、美的調和を作り出す点で芸術的活動と類似した創造的活動として捉えられることから、著者はそこに神の創造性を模倣する人間の神の似像性を読み取ろうとしている。このような解釈はスコトウスの美学を扱った Kovach の論文³⁾に影響されたものと考えられるが、スコトウスはボナヴェントゥラなどの一時代前のフランシスコ会の神学者たちに比べると、神の似像という神学的テーマを取り上げることにはそれほど積極的ではない。もちろん彼は神学において神の似像性を否定するわけではなく、アウグスティヌスの伝統に基づいて精神における三位一体性を論じているが、それを自らの神学の中心的なモチーフとして提示することはない。実践に関しても、創造する神の意志は実践知を必要とせずにそれ自体で正しく決定すると考えられるので、従来のように神の創造を制作技術との類比によって捉えることは、もはや根本的な意義を失っていると考えられる。したがって、倫理的実践が芸術的行為と類似性をもつとしても、それを神の創造性の模倣として捉えることは、たんに伝統的な神学の図式をあてはめるだけのようにも思われる。

さらに永遠的に働く神の意志と時間的に働く人間の意志とは、同じく自由な意志と語られても、存在論的な差異によって人間の意志が神の意志に一致することは絶対に不可能であり、両者の意志の調和は、神と人間双方の自由な愛の応答関係を可能にする愛徳*caritas*に基づくものと捉えられている。すなわち、人間の意志は神から与えられる愛徳を受け入れることを通して、神に受け入れられるハーモニーをもつと理解されるのである。著者がスコトウスにおける倫理的実践における神の似像性を取り上げたのは、神と人間との自由な意志の働きそれ自体の類似によるのではなく、外的行為としての倫理的行為のもつ調和が神によって造り出された肉体美の調和と類似すると捉えられていることによると思われるが、そこでは美のもつ存在様態が問題となっても、

美の存在根拠まで考慮されているわけではない。それゆえ、スコトゥスにおける神の似像性の解釈については、存在論との関連を踏まえた、より綿密な神学的研究が望まれる。

著者はスコトゥスが倫理的徳を説明するために、トマス・アクィナスに比べて、医学よりも芸術の例を好んで取り上げていることに注目し、そのことがスコトゥスの美的な倫理観を特徴づけると考えている。全体として本書は、スコトゥスにおける倫理的徳の重要性に光をあてようとしており、スコトゥスの倫理観がたんに意志の自由を主張するだけではないバランスの取れたものであることをその徳論を通して裏付けようとしている。徳と自由意志の相互関係についてはすでに博士論文で詳しく論じられていたが、そこでは徳によっても自由な意志が制限されないという側面が注目されていたのに対して、本書では徳によって自由な意志が完成されていくというダイナミックな側面により重きが置かれている。そこから、実践知の徳である思慮の重要性についてもクローズアップされ、12世紀以降のスコラ神学におけるアリストテレスの思慮の解釈が歴史的な脈絡から説明されている。著者は、スコトゥスにおける思慮と倫理学との区別から、思慮はたんに倫理的原理に関する抽象的な認識に基づくのではなく、個別的状況に直接関わる点で直観知に基づく認識であると解釈しようとしている。この点もスコトゥスが実際には述べていない点であるため、直観知と抽象知に関する彼の認識理論と関連させて注意深く検証する必要がある。

スコトゥスがこの世における人間に直観知を認めたかどうかについては解釈が分かれているが、著者の見解はこの世における直観知の可能性を認めたと捉える Day⁴⁾と Wolter⁵⁾の解釈に基づいている。スコトゥスは至福者以外には神の直観知を認めてはいないが、記憶との関連で感覚的に捉えられた偶然的事実を知る直観知についても述べていることから、この世における実存 *existentia* に関する直観知の可能性を認めていたと理解するのである。思慮は現実の状況を的確に判断することを必要とするので、当然このような直観知なしには不可能であるとも言えるかもしれないが、個別的状況と倫理的な根本原理との連関を正しく判断することにこそ思慮があると考えられるので、著者の言うように思慮がたんに個別的な事実に関わる直観知を含むことだけでは、倫理的認識の特徴を理解するうえで本質的意味をもつとは思われない。

スコトゥスは従来のアリストテレスの実践的推論の理解を継承しながらも、様々な個別的な諸要素のうちに美的調和を読み取ることをして倫理的認識を理解しようとし

ている点では、確かに新たな認識観をもっていたと言わざるをえない。スコトゥスは直観を推論と対比するのではなく、抽象と対比しているのも、もし倫理的善や美が概念によらずにその実存に即して調和として直観されると考えていたとするならば、それはきわめて独創的な認識観であったと言える。しかし直観に関してだけでなく、美的判断や倫理的判断を根拠づける認識理論もスコトゥスにおいて十分に形成されているとは言えないので、その可能性をどこまで認め、いかに解釈するかが今後のスコトゥス研究の大きな課題になると思われる。こうした意味で本書は、スコトゥスの厳密な解釈を追究したものではないが、研究者に多くの問題意識を与える書であると言える。

註

- 1) Ingham, M., *Ethics and Freedom, An Historical-Critical Investigation of Scotist Ethical Thought*, 1989, University Press of America.
 - 2) Ingham, M., "Scotus and the Moral Order". *American Catholic Philosophical Quarterly* 67, 1993, pp. 91-103. "Duns Scotus' Moral Reasoning and the Artistic Paradigm", *Via Scoti*, Rome, 1995, vol. II, pp. 825-838.
 - 3) Kovach, F., "Divine and Human Beauty in Duns Scotus' Philosophy and Theology", *Deus et Homo ad Mentem I. Duns Scoti*, Rome, 1972, pp. 445-459.
 - 4) Day, S., *Intuitive Cognition: A Key to the Significance of Later Scholastics*, Franciscan Institute Publications, 1946.
 - 5) Wolter, A., "Duns Scotus on Intuition, Memory and Our Knowledge of Individuals", 1982, Reprint in *The Philosophical Theology of John Duns Scotus*, Cornell University Press, 1990, pp. 98-122.
-